



Title	モノギとモギドウ : 能の着る, 脱ぐの一考察
Author(s)	奥戸, 一郎
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52846">https://doi.org/10.18910/52846</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## モノギとモギドウ 《能の着る、脱ぐの考察》

奥戸一郎／滋賀文化短期大学

「能」は歌舞と語りもののドラマで能の登場人物の「出立」は原則として舞い語る為に相応しい機能の追及と積み重ねられた感覚表現の結果と考えられる。「出立」は1冠り物類2仮髪類3面類4装束類5持物類に分類されるがここでは4を中心に考察する。装束の特徴の1)は現在演じられている能200余番に使用される種類は以外な程少なく、用法も限られるが特徴2)として無数の文様と豊かな色彩、巧な織物組織の変化が登場人物の性、年齢、職業、社会的地位と感情ばかりか季節、風景迄も自在に表現する。特徴3)対丈に清々しい白足袋と特徴4)重く厚い装束が肉体を覆い隠す鋭角で立体的な着付、登場人物それぞれの「出立」の極端な対比が特徴5)である。これらの特徴は能ガリアリズムの超越を目指し、様式化集約化の追及と個人の感情や行動を一般的なヒトの喜怒哀楽に普遍化して僅かな「型」で表現する狙いや静止の多い登場人物の心象風景の文様化色彩化、また人、時間、空間を重層化させ見所(観客)に無限の空想を生み出すシカケの起点として挙げられる。あの世とこの世が同時に存在する、廃墟のような何も無い超常空間の能舞台が以上の特徴を持つ「出立」の狙いをより効果的にバックアップする。磨き抜かれた素木の舞台の白足袋の「ハコビ」の美しさは比類が無い。能舞台の機構から演者は常に四方からの視線に晒され前後の動きが主となり、芸や位の決め手となる後ろ姿の美しさも「出立」が作り出す。「出立」は登場人物の時代、地位や人格等を解説しないし登場人物は固有の「出立」を持たないのは見所に豊で瑞々しい

イメージを惹起させる為である。シテは役作りと演出の為に「出立」の色彩と文様の取り合わせに心を砕く。様々に異なった装束が時代を超えて組み合わされると予期しない新鮮な美しさを生む、これも長い歴史と強い伝統を持つ能のみが持つ魅力である。能役者が装置も照明の技巧も無い舞台で長時間見所の視線に耐え、様式化された僅かな動きで幾つもの場面を瞬時に現出できるのも、先人が鋭い感覚と秀逸な手仕事でデザインした色彩と文様があればこそである。観世寿夫が「能役者はあの世とこの世を漂っている靈魂だから尽きぬ思いや訴えを安心して託せる相手、託すことで呪術性を持たせて貰える相手がいる。それがオモテだ」と言ったが、これはそのまま装束にも言える。身体を覆い隠す硬く身体に添わぬ「出立」は日常的な動きを封じ、現実では滅多に見られぬ非日常の能独自の美しい「型」を創造した。実際に「出立」で見ると日常の感覚は殆ど無くなり、唯一外界との確実な接点は両足裏のみで、辛うじて残る日常の感覚を足裏に集中し舞台に獅噛み付くのが「カマエ」となり大地(舞台)から一瞬も離れ難い動きが摺足となり「ハコビ」となった。現在我々が眼にする能独特の動きは「出立」のオモテと装束が創ったと考えても強ち見当外れでは無い。楽屋で能役者に着付ける事を「物着せ」と呼び明治迄は専属の物着せ方が居た程の大事である。ここに言う「物」は決して形似下の物体では無い。「つきもの」「もののけ」「ものぐらい」「ものいみ」或いは「ものがたり」などと源の同じ「超自然の力」で、この「物」が能役者を憑依させ

る。変身のスタートは「物を着る」事でゴールが「オモテを着ける」事である。普通は楽屋で行う「憑依」を舞台で「モノギアシライ」と呼ぶ特殊な囃子で丁重にするのが『モノギ』である。『モノギ』の後の舞、語りはより印象が鮮明になる、見所が『モノギ』によってシテと同化し憑依させられ能が本来目指す「一瞬の夢幻」を共有したからである。能が元来持つ本質、基本構造に触れた「中入りとは鏡の間でモノギをする事である」と指摘した説の様に『モノギ』は *De trois unites* の一本の筋の追及からはけっして生まれない。『モノギ』は能の中心三番目物の22%を占め、『モノギ』の衣は想人の形見や思い出の品である。衣に纏わる記憶、記憶が呼び戻した夫や恋人がシテの女に語らせ舞わせる。衣を通して男と同化した舞い手は見所共々夢現の世界に迷い込む、これが「移り舞」で能のメインディッシュの醍醐味である。これに比べて男の『モノギ』は目上の前で舞う為に衣服を改めたり、芸尽くしを披露する為の軽いものに過ぎない。故に『モノギ』は女のシテの為に存在価値があり、世阿弥以来の主張（女の能を最高位に位置づける）によれば『モノギ』は能の本質を本質たらしめる存在理由の第一である。能の『モノギ』の記号は現代の衣服の記号、「変身」と「外界と交信する」に一見似るが両者の衣を着る意味は全く異なる。『モノギ』に見られる曾て衣が持っていた呪力は現代の文明社会では殆ど失われ、辛うじて欧米の最高級ブランドと老舗のオビキモノに因らしきものが残るばかりである。『モギドウ』は文字どおり裳（腰から下に着る衣）だけの姿で、上体は裸の記号と読み解けば、『裳着胴』のシテの発信が適確に受信できる。然し『モギドウ』は能が理想とする貴やかで幽玄な世界からは最も遠い地相にある。能にしばしば見られる逆説的表

現（柔らかで弱いものを鋭く強く、荒々しく粗野なものを緻密優雅に）を考慮しても『モギドウ』は能の「出立」では群を抜いた異相で非日常の姿である。舞い語る為に憑依すべきモノを身に着けぬシテは舞いも語りもしない、深い悲哀に沈み、絶え間無い嫉妬に身を焼き、積もる怨恨を嘆き、地獄の苦痛に喘ぎ、炎の様に激怒するばかりである。

これらの感情は程度の差こそあれ現代の日々の暮らしの中で我々が常に体験している。能の演出では不思議な程『モギドウ』はヒトが原初から抱き続けた感情の素直で具体的な表現で、露になった精神そのものの明瞭な視覚化は能に馴染みの無い現代人にも共鳴し易い感情移入の容易な「出立」である。『モギドウ』の着手は男性では虜囚（仏の救いを念じて掛絡をかける）、盗賊、怪神、鬼神、鬼畜等十九、女性では嫉妬の果ての鬼や蛇、皇女の乞食、落人の女武者等九、外に子方（少年少女）がある。『モギドウ』のシテは能には珍しく荒々しい動きをするが舞台に居る時間は例外なく短い、堪えに堪えた激しい感情を瞬時迸らせてすぐに消える。或るものは救われるが殆どは尽きぬ嘆きや恨み悲しみ、底知れぬ怒りと共にあの世に帰るのが『モギドウ』のシテの通例である。『モギドウ』を能が発生当初から殺落とし続けても残り続けた全てのドラマの根源「日常の感情の直截な表現」の記号と見れば『モギドウ』が「出立」の中では異例、少数にも拘わらず特別な大事として重く扱われている謎も解ける。『モギドウ』が現代の見所に強いインパクトを与えるのも世阿弥の残した「万人愛敬」の視覚化の典型の一つである。『モノギ』『モギドウ』を視座に能の「出立」を考察したが、小学にとって能は五感こそ楽しませてくれるが理性を拒む「あやしのもの」である。